

2 メディア行動

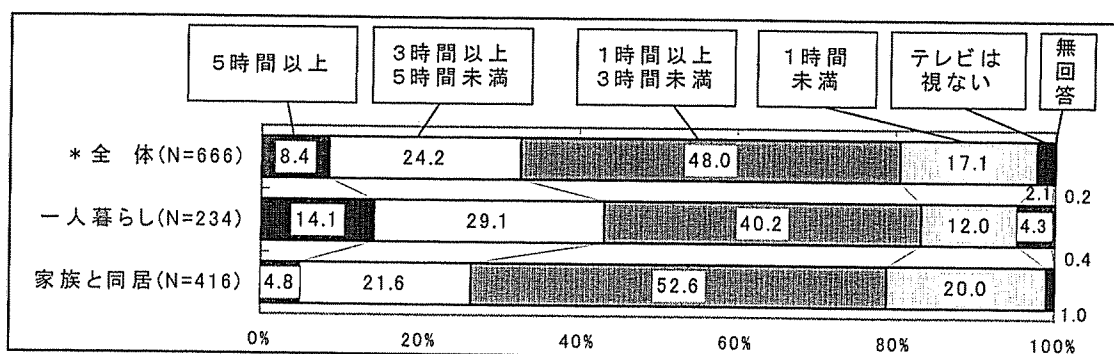
(1) テレビ視聴

① 1日の視聴時間

普段の1日にテレビを視聴している時間は、「1時間以上3時間未満」の者が半数近くで最も多く、次いで「3時間以上5時間未満」が4分の1程度である。

性・年齢などによる違いは殆ど見られず、むしろ居住形態の差による違いが見られる。すなわち、一人暮らしの者の方が家族と一緒に生活している者よりも、テレビを長時間視聴の傾向がある。テレビが無聊の友であることの一証左といえようか。

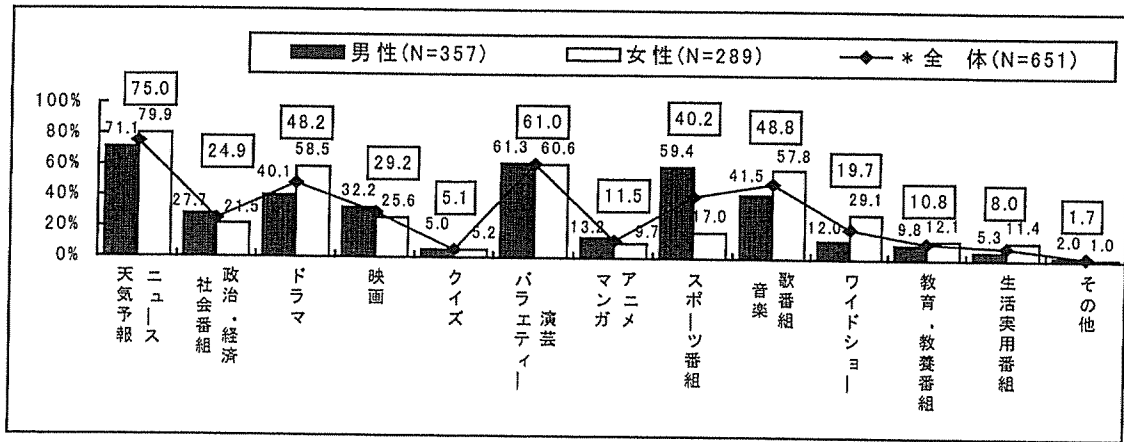
(図表1) 1日の視聴時間



② よく見る番組

よく見る番組のトップは「ニュース・天気予報」で、次いで「演芸・バラエティ」「歌番組・音楽」「ドラマ」「スポーツ」といった順に、いずれも4割以上の者がよく視聴している。この番組嗜好傾向に関しては、視聴時間量と異なり、男女差が比較的顕著にみられる。「ニュース・天気予報」と「演芸・バラエティ」に関しては男女差は見られないが、「歌番組・音楽」「ドラマ」「スポーツ番組」については男女間で16%から42%もの差が見られる。前2者は女性、後者は男性に、より好まれている。このほか男女間で15%以上の差があるのは「ワイドショー」で、これも女性好みの番組である。

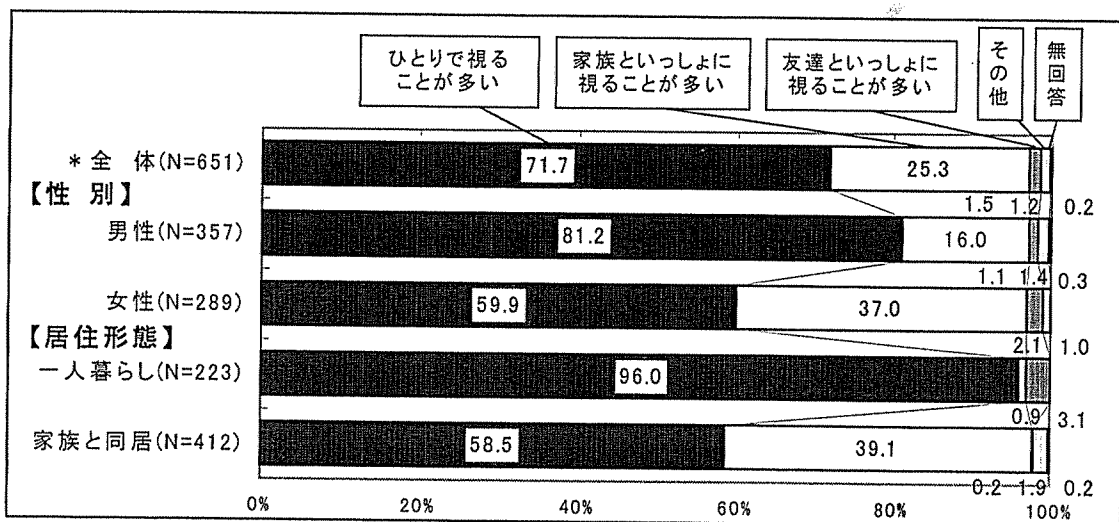
(図表2) よく見る番組



③一緒に見る相手

全体の7割がテレビを普段「ひとりで」視聴しており、「家族と一緒に」視聴することが多いのは全体の4分の1である。予想されるように、一人暮らしの者は殆どが「ひとりで」視聴しており、家族と同居している者は4割が「家族と一緒に」に視聴している。しかし、家族と同居している者でも6割近い者が「ひとりで」視聴している。テレビの個人化が一般化しつつあることの反映といえよう。また、男性は8割が「ひとりで」視聴することが多いのに対して女性は6割で、37%の者が「家族と一緒に」にテレビを視聴することが多いと答えている。(男性では16%) この違いは性差に由来する面もあると考えられるが、“一人暮らし”対“家族と同居”の比率が、男性で4：6、女性で3：7となっており、居住環境が影響している部分があることも無視できないであろう。

(図表3) 一緒に見る相手

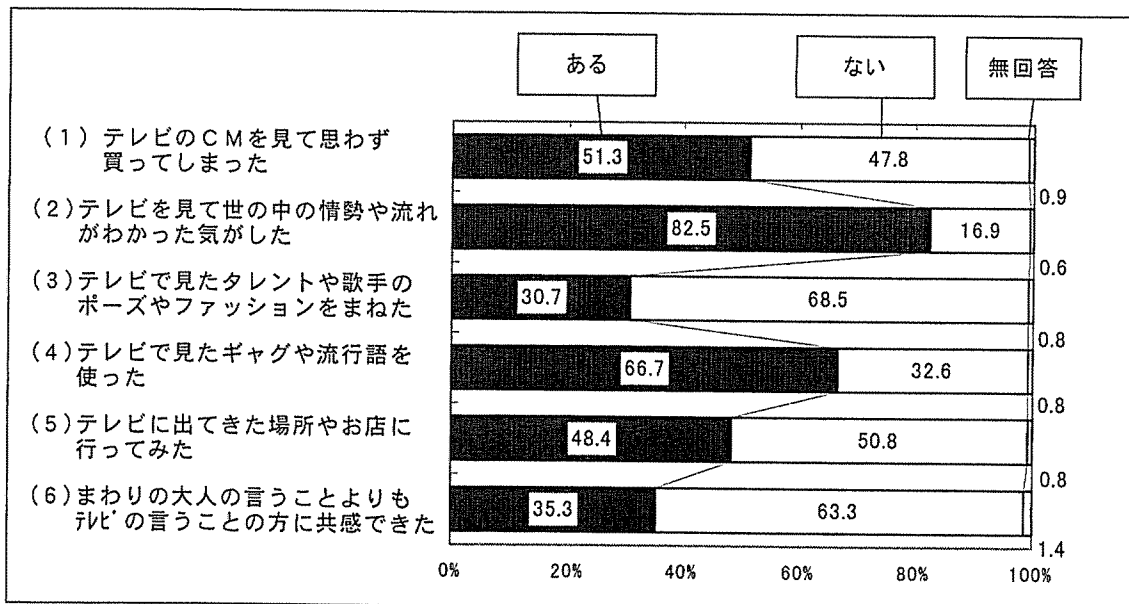


④日常行動へのテレビの浸透度

テレビは現代の日本人の生活のなかにすっかり定着しており、テレビのない暮らしといったものは殆ど考えられなくなっている。そうしたテレビの日常行動への浸透度を、6つの質問によってたずねてみた。世の中の動きを理解する上でテレビの存在を評価しているものは8割にのぼり、先によく視る番組の筆頭に「ニュース・天気予報」があげられていたことと符合する。しかし、テレビの言うことに信頼をおいているかという点になると、周囲の「大人の言うことよりも共感できた」という経験をもつ者は3分の1ほどに過ぎない。テレビはいろいろのことを知らせてくれて便利だが過信は出来ない、というところだろうか。

一方、より具体的な日常行動への浸透度となると、「CMを見て思わず買ってしまった」り、「テレビに出てきた場所や店に行ってみた」り、「テレビで見たギャグや流行語を使った」りした経験は、半数から7割近くの者が持っている。たださすがに大学生となると、「タレントや歌手のポーズやファッションをまねた」ことのある者は3割と激減する。これらの項目のうち、「CMを見て思わず買ってしまった」経験と、「テレビに出てきた場所や店に行ってみた」経験については、女性の方が男性よりも多少多くみられるが、それ以外の項目に関しては属性による差は殆どない。

(図表4) 日常行動へのテレビの浸透性



日常行動へのテレビの浸透状況をたずねた6項目の質問に対する回答を総合して、「テレビ浸透度スケール」を作ってみた。これは6つの質問のそれぞれについて「1 ある」と答えた場合に1点、「2 ない」と答えた場合に0点を与えて足し合わせたもので、6から0までの間に得点が分布するスケールである。得点の高いほど日常行動のなかにテレビが浸透していると想定される。得点の分布は図表5のようになっている。この得点及び分布自体に特別の意味はないが、テレビとの関わり合いの強さを示す指標の1つとして、以下の分析に用いる予定である。

(図表5) テレビ浸透度スケール (％)

0点	1点	2点	3点	4点	5点	6点	不明
5.1	9.9	21.0	21.2	18.6	13.7	8.3	2.3

⑤暴力シーンに対する反応

テレビ番組の暴力的場面が青少年の心理や行動に好ましくない影響を与えているのではないかという懸念が、各方面から繰り返し表明されている。これに対する適確な回答は容易に提示することはできないが、今回の調査では暴力シーンを視た時に経験した反応を答えてもらうという形で、影響の一側面を測定してみた。

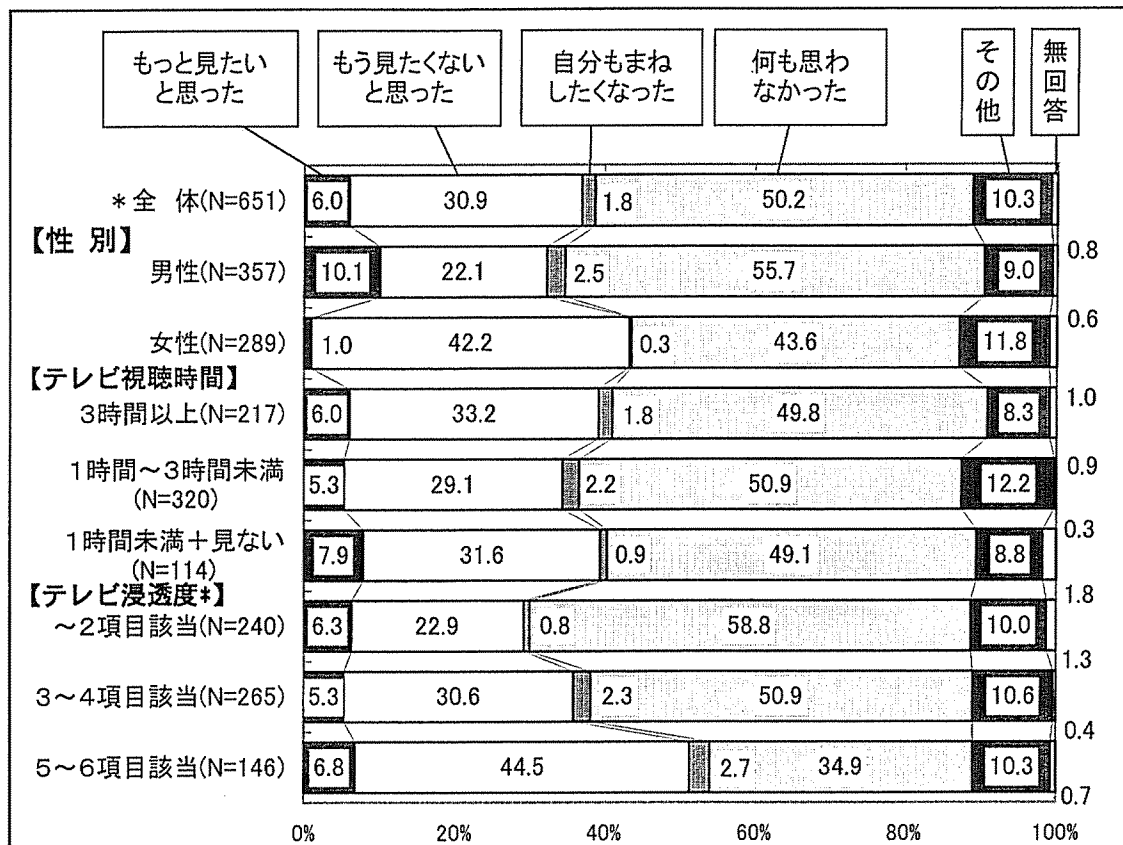
その結果、「何とも思わなかった」という回答が半数(男性55.7%、女性43.6%)。「もう見たくないと思った」という拒絶的反応が3割(男性22.1%、女性42.2%)で、「もっと見たいと思った」及び「自分もまねしたくなった」という誘発的な反応は1割にも満たなかった。こうした問いに対する回答は建て前的なものに偏ることが避けられないので、額面通りに受けとることは出来ないかも知れないが、大多数の青少年にとってテレビの暴力シーンが現実の暴力の直接的な誘因になったり、暴力行為を好む心性を醸成したりするとは考えられないであろう。

むしろ、半数の者が「何とも思わなかった」と答えていることが、暴力に対する感覚の鈍磨を意味しているとしたら、テレビの好ましからざる影響として、問題と言わなければならない。この点を検討するために、テレビを長時間視ている者、又、テレビの浸透度の高い者の間に、「何とも思わなかった」と答える割合が大きいかどうかを見てみた。

その結果、1日のTV視聴時間の長さや暴力シーンに対する反応との間には相関がみられず、テレビ浸透度との間では、むしろ浸透性の低い者の方が「何とも思わなかった」という回答の比率が高かった。この結果から早急に結論を引き出すことは避けたいが、少なくとも、テレビを長時間視たり、日常生活のなかにテレ

ビが深く浸透していることが、暴力に対する不感症的な反応を生むという断定は、避けるべきであろう。

(図表6) 暴力シーンに対する反応



- * テレビ浸透度項目
- ・テレビのCMを見て思わず買ってしまった
 - ・テレビを見て世の中の情勢や流れがわかった気がした
 - ・テレビで見たタレントや歌手のポーズやファッションをまねた
 - ・テレビで見たギャグや流行語を使った
 - ・テレビに出てきた場所やお店に行ってみた
 - ・まわりの大人の言うことよりもテレビの言うことの方に共感できた